

『帝都復興秘録』

東京市政調査会 [編]

宝文館 [刊] 1930年3月 四六判/455頁 図書番号 OB-0375

関東大震災の復興事業もほぼ完成した1930(昭和5)年、東京市政調査会は震災当時の閣僚や震災復興に携わった人々50数名を招き、帝都復興の座談会を行った。四夜にわたった座談会の速記をまとめたものが本書である。その目的は凡例に「都市計画史に永く記念せらるべき帝都復興事業には、其真髓を伝ふる inner history がなくてはならぬ」とある。編集の中心となった池田宏(東京市政調査会理事、前帝都復興院計画局長)は、序文で当事者から直接話しを伺えて、ひとつは現代のため、またひとつには後世のために文献として寄与することができたとしている。

本書は、第1から第5までに分れ、第1は座談会に出席しなかった山本権兵衛(前内閣総理大臣)と伊東巳代治(前帝都復興審議会委員)の談話。第2は阪谷芳郎(東京市政調査会会長、前帝都復興院評議会議長)、宮尾舜治(前帝都復興院副総裁)、永田秀次郎(前東京市長)など復興の責任者であった人々の座談。第3は宇佐美勝夫(前東京府知事)をはじめ東京府・東京市の幹部の話。第4は笠原敏郎(復興局建築部長)、河北一郎(復興局整地部施業課長)、折下吉延(復興局建築部公園課長)など主に復興院や復興局の担当者の座談。第5は復興院の参与たちの話である。

伊東巳代治は、区画整理の趣旨には大賛成であるけれども、それは地主の組合ですべきことであり、政府が公権力をもって土地を取り上げることは憲法が保障する私有権を侵害するので、当時は反対をした。震災後に市民の自制により実現できたことは奇跡と言えるが、震災後の非常時の立法には疑問があると述べている。

佐野利器は、内務大臣兼帝都復興院総裁であった後藤新平から建築局長を命じられたとき、「何ををするのですか」と聞いたところ、後藤は「復旧などではなくて是からは復興だ。此際何をするかということはソツチで考へろ、俺にわかるか」と言ったとしている。そして、佐野は「やはり偉人の言といふものはギユツと胸に響くものでありまして、此お話を伺つて私も『よしッ 一つ有ん限りの力を出して御勤めして見よう』といふ心持が起つて来たのであります」とその時の気持ちを語っている。

また、帝都復興院で復興計画策定を担当した山田博愛は、最初に立てた理想案約41億円が30億、20億、10億と次第に減額された様子や、復興院の職員は一時に寄り集まって来たため、意思疎通がうまく行かず戦争状態のような感じで、復興計画も朝出来たかと思うと昼に変わり、晩にまた変わるような状況だった。そこで、お互いに朝刊はどうだ、正午版はどうだ、夕刊はどうだというような冗談を言うようになったと当時を語っている。

本書には、震災から復興までの順序だった記述はない。しかし、実際に復興に携わった人々が苦労や困難に立ち向かっていった様子を率直に語っており、読者に復興への熱い思いが伝わってくる。その思いを象徴するかのようには、復興の意気を詠った『復興行進曲』の歌詞(東京市政調査会が北原白秋に作詞を依頼)が掲載されている。

(平田幸子・市政専門図書館司書課長)